にわとり小屋でのひととき

椎名　裕子

新入園児も少しずつ幼稚園に慣れてきて、また年長児もようやく生活に落ち着きを見せ始めている。新入園児に比べると、やはり年長児は自信に満ちている。「年長になったんだ」という誇らしさがあちらこちらで感じられたりする。幼稚園で飼っているにわとりの世話も、「年長になったからできる！」という自慢の仕事の一つで、にわとりの好きな子、世話をしたい子が、毎朝欠かさずにやってくる（ちなみにうちの幼稚園では、当番ではなく、世話をしたい子が世話をすることになっている）。

キャベツを切って、水を取り替え、小屋の掃除をする…。五〜八人程で、二〇分余りの作業である。

初めのうちは、慣れない包丁に冷や冷やしたり、にわとりの鳴き声に驚いたりしながらも（実のとこ

◀キャベツを切って…、包丁さばきもなかなか

ろ私はにわとりがあまり好きではない)、次第に慣れてくると、にわとりの世話以外の楽しさがあることに気が付いた。それは、子ども達がにわとりの世話をしながら、いろいろな会話をしているということだった。子ども達との世間話は結構楽しいものである。「にわとりの世話は大変だ!」と思いつつも、この子どもたちとのささやかなひとときを求めて、にわとりの世話を頑張っている(最近にわとりが平気になってきた)。

ある日の会話…

①餌をどうあげようか?

にわとりたちは、毎朝餌を楽しみにしている(に違いない)。特に月曜日の朝などは大騒ぎである。中には、子ども達が餌箱を置くのを待ちきれずに飛び掛かってくるのもいて、これがなかなか怖い。にわとりに足を踏まれるくらいは序の口で、手にもった餌箱に飛び掛かられると思わずすくんでしまうこ

ともある。初めのうちこそ、小屋の中に入れる勇気ある（？）友達に頼んで餌箱を置いてもらったりもしているが、子どもたちは、少しでも餌箱を安全に（？）小屋の中に入れようと、いろいろな方法を試みている。

〈その1〉

まず、にわとりが水を飲んでいるうちに、とにかくサッと置いてくる（しかし、そうはうまくいかず、にわとりは餌箱をめざしてとんできてしまった）。

〈その2〉おとり作戦

誰かが小屋の外でにわとりの気を引く。そのすきを狙ってサッと置いてくる（これはさらに改良されて、外から少しの餌を撒いてにわとりの気を引くということになった。これはかなり効果的でよく使われている）。

▲おとり作戦

〈その３〉ガード作戦

二～三人がかりで小屋の中に入り、にわとりが飛んでくるのを防ぎながら、餌箱を置いてくる。みんなとても慎重である。

「あのにわとりはいつも僕にとんでくるんだよ。だからあのにわとりは、苦手だなあ」と呟く子もいるけれど、友達とワイワイしながら取り組むうちに少しずつにわとりを怖がらずに、餌箱を置いて来ることができる子どもが増えてきている。また、自然と友達と協力し合うことを経験したり、「〇〇ちゃんに助けてもらった」と友達の良さに気付くきっかけにもなったりしているようだ。

②どっちが強い？

ここ数日、どうもにわとり小屋では喧嘩が絶えない。子ども達もにわとりの喧嘩に頭を悩ませている。おんどりがめんどりを盛んにつついているのを見て、

私「うーん。やっぱり、オスのほうがメスよりも強いのかなあ」

Mちゃん（キャベツを切りながら）「にわとりは人間と違ってオスの方が強いんだね」

私「そうそう、オスの方が…、えっ？　Mちゃん、今『人間と違って』って言わなかった？」

Mちゃん「うん、そうだよ。だって人間はお母さんの方が強いじゃん」

―しばしの沈黙―

私「ねえMちゃん。お父さんとお母さん、どっちが強いの？」

Mちゃん「お母さん！」

私「！！」

K君「僕のうちは、お父さんが強いよ」

S君「僕のうちも。でもね、お母さんに時々おこられると『ごめんなさーい』って言うんだよ」

みんな「えー、おかしいの。ワハハ…」

こんな楽しい会話を聞きつけて、隣の事務室から

も「何おかしいお話してるの」と事務の先生も飛び入り参加。あれこれと家族談義に花を咲かせたひとときとなった。もちろんこの日のにわとりの世話はかなり時間がかかってしまったが…。

③『ラッキー　クッキー　？？？』

「ラッキー　クッキー　ポッキー」　正解！
「ラッキー　クッキー　ユウキー」　ピンポン！
「ラッキー　クッキー　マークン」　ブブー！
にわとりの世話をしながら誰ともなく始まった言葉遊び。
「ラッキー　クッキー　ツミキ」　ピンポン！
「ラッキー　クッキー　にわとり」　ブブー！
ほうきを片手に「ラッキー　クッキー　…？」とぶつぶつと考える子ども達。余りに考え過ぎて掃除をするのを忘れがちになってしまうこともある。けれどなんとなく楽しい。「ねえ早くやって遊びに行こうよ」となかなか言えず、にわとり小屋の中で子

▶楽しくおしゃべりをしながら…

ども達と一緒に「ラッキー　クッキー　…?」。にわとりの世話のように子どもにとっては仕事の時にも、耳を傾けようとすれば、本当に思わぬ発見やおもしろい話を探すことができる。

以前はにわとりの仕事を早くきれいにしなければという気持ちばかりで子どもに接してきたように思う。だからなかなかこうした子どもの会話が耳に入ってこなかった。しかし、ちょっと気持ちを変えて、子どもと楽しい時間を共有しようとすれば、思わぬことに気付くことができるのかもしれない。特に年長児は本当に会話が多くなって、ちょっとしたところでも子ども達のおもしろい会話に出くわすことがある。「へー、〇〇ちゃんってこんなこと考えていたんだ」とか、「今の子ども達の話題はこんなことなんだ」など、いろいろな発見がある。お弁当を食べている時でも、「赤ちゃん、かわいいでしょう」の問いに、「もう大変だよ、泣いてうるさいし…」と思わぬ子どもの本音？が聞けることもある。こうした子どもの世間話には、遊びの中での会話とはまた違ったその子らしさがにじみでているように思われる。一日の幼稚園生活の中には、きっと子ども達の楽しさがいろいろな所で見られているのだろうけれど、耳を傾ける余裕がなくなってしまっているようで、なかなか見付けられない。今年は、子ども達のおもしろさをひとつでも多く見付けられたらいいなと思っている。そのためにも、アンテナをはりめぐらせていきたいと思う。

（千葉大学教育学部附属幼稚園）